HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	学問的メイソンリーと宗教的メイソンリー ： ウィーンのロッジ「真の一致」の古代密儀研究について
著者	北原，博
引用	北海学園大学法学部50周年記念論文集：527-554
発行日	2015-03-15

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

学問的メイソンリーと宗教的メイソンリー

――ウィーンのロッジ「真の一致」の古代密儀研究について――

北原　博

はじめに

エジプト学者ヤン・アスマンは一七八〇年代前半にウィーンにあったフリーメイソンリーのロッジ「真の一致」(Zur Wahren Eintracht)での密儀研究に注目し、彼らの理解する古代密儀は二重宗教であり、隠された真理は理性的な「一にして全の神」にあることを指摘している。[1] 二重宗教とは、民衆向けの宗教とは別に、聖職者や為政者向けの真の教えがあり、民衆には真理は隠されているというものである。この構造はモーツァルトの『魔笛』*Die Zauberflöte*（一七九一年）にも持ち込まれており、アスマンは、タミーノとともにパパゲーノにも課される試練（沈黙の試練）を小密儀とし、タミーノ（およびパミーナ）のみが許されるその先の試練（火と水の試練）を大密儀と捉え、このジングシュピールの持つ一見混乱した筋に明快な解釈の視点を与えることに成功している。[2]

古代の儀式の研究は、本論で取り上げる三論文でも関連づけられているように、フリーメイソンリーの秘密と結びついている。フリーメイソンリーにはよく知られた「徒弟」「職人」「親方」という三位階で構成される象徴的位階の

上に、各流派によってさまざまな高位階システムが継ぎ足され、高位階にはテンプル騎士団や薔薇十字団、錬金術などの秘密が伝えられていると期待されていた。一七八〇年代初頭にドイツ語圏で大きな勢力を有していたのは厳守派(Strikte Observanz)であり、この派はテンプル騎士団の継承を主張していた。[3] ところが、カール・レオンハルト・ラインホルト(一七五七〜一八二三年)の『ヘブライの密儀』の最終章でも言及されているように、一七八二年のヴィルヘルムスバートのフリーメイソン会議において結社の指導者たちは自分たちが何ら秘密を知らないということを露呈してしまった。[4] その結果、ドイツのフリーメイソンリーは混乱状況に陥っていた。こうした状況下で、高位階の密儀を無批判に信仰するのでもなく、象徴的三位階に留まって自己の道徳的形成に自足するのでもないメイソンたちが「解決にはならずとも、少なくともメイソンの問題のかなりのものについて有用なヒントを得、検討できるように、古代の密儀に取り組んだ」[5]のだという。古代密儀がそれぞれの最盛期にあったときには、「秘儀を伝授された者は秘儀の対象を誤ることも、それゆえ関心を示さずになおざりにすることもなければ、熱狂して乱用することもできなかった」[6]のであり、まさに一七八〇年代のメイソンリーが置かれていた状況の対極にある。古代密儀の研究は、メイソンリーの原初的な形態をそこに求めることで、単なる慈善団体でもオカルト結社でもない、秘儀結社としてのフリーメイソンリーを救い出そうとする試みであるといえよう。そのように考えると、ウィーンの密儀研究を論じる際の着目点として、小密儀と大密儀の二重宗教はもちろんのこと、二重宗教を担っていた大密儀の継承の構造とその形骸化・堕落をメイソンが自分たちの混乱とどのように結びつけているのかという観点もまた重要であるように思われる。本論ではこの点を明らかにしたい。本論では「真の一致」の研究成果である三つの論文を考察の対象とするが、各論文を詳細に検討することで、三論文の著者の間にある儀式研究に対する微妙なずれが明らかになるだろう。

本論では、まずロッジ「真の一致」で密儀研究を主導したイグナーツ・フォン・ボルン(一七四二〜一七九一年)

による論文「エジプト人の密儀について」*Ueber die Mysterien der Aegyptier*（一七八四年）[7]を考察することで、ウィーンのメイソンたちの関心の所在を確認し、その上で学問的メイソンリーと宗教的メイソンリーという対になっているテーマを取り上げる。学問的メイソンリーについては『フリーメイソンのためのジャーナル』第二巻第三号（一七八五年）に匿名の論文「学問的メイソンリーについて」*Ueber die wissenschaftliche Maurerey*[8]が掲載されている。一方、宗教的メイソンリーについてはラインホルトの著書『ヘブライの密儀あるいは最古の宗教的フリーメイソンリー』*Die Hebräischen Mysterien oder die älteste religiöse Freymaurerey*（一七八八年）で取り扱われている。なお、本論の目的はこれらの密儀論の今日の研究水準からみた妥当性を検証することにあるのではなく、あくまでも一七八〇年代のウィーンのメイソンたちが自分たちの正統性を担保するためにどのような密儀観を必要としていたのかを探ることにある。

（1）Vgl. Jan Assmann: *Religio Duplex. Ägyptische Mysterien und europäische Aufklärung*. Berlin 2010. Jan Assmann: Nachwort. In: Carl Leonhard Reinhold: *Die Hebräischen Mysterien oder die älteste religiöse Freymaurerey*. Herausgegeben und kommentiert von Jan Assmann. Neckargemünd 2001, S. 157–199.

（2）Vgl. Jan Assmann: *Die Zauberflöte. Oper und Mysterium*. Frankfurt 2008.

（3）厳守派メイソンリーについては以下を参照のこと。石川實「十八世紀聖堂騎士団――厳守派フリーメイソン盛衰記――」『文学及び社会における「近代」』大阪産業大学産業研究所　二〇〇一年、一～三一頁。

（4）Vgl. Reinhold, a.a.O., S. 117f.

（5）Ebd., S. 14f.

（6）Ebd., S. 15.

（7）*Journal für Freymaurer* 1 (1784) 1. Vj., S. 15–132.

（8）*Journal für Freymaurer* 2 (1785) 3. Vj., S. 49–78.

I　ロッジ「真の一致」と演習ロッジ

「真の一致」はロッジ「戴冠した希望」（Zur Gekrönten Hoffnung）を母体に一七八一年三月一二日に設立された。同年五月三日にドイツ大ランドロッジ（Große Landesloge von Deutschland）の認証を得ている。[9] このロッジには後に、ボルン、ゾンネンフェルス、ブルーマウアーらをはじめとするウィーンの啓蒙主義の中心人物たちが参集し、オーストリア内からだけでなく、諸外国からも多くのメイソンたちが訪問した。イルメン編纂のプロトコルの集計では、延べ人数にしておよそ二三六〇人に及ぶという。[10]「真の一致」は当時ドイツ語圏のロッジの中でも最も名声を得たロッジのひとつなのである。

「真の一致」の名声は多分にロッジのマスター、ボルンに負っている。彼はトランシルバニア地方の出で、ウィーンのギムナジウムで学んだ後、イエズス会に入り、プラハの大学やスロバキアのシェムニッツにある鉱山学校で学んだ。プラハの造幣・鉱山監督局の鉱山官を経て、マリア・テレジアによって宮廷博物標本室の専門職員に招聘され、さらに七九年からは宮廷顧問官となった。鉱物学者としては金属製錬のためのアマルガム法の改良で知られる。また、ボルン自身ウィーンの代表的なイルミナーティであり、ボルンのロッジには多数のイルミナーティが在籍していたこともあり、「真の一致」はイルミナーティの結社の影響下にあったと見なされている。そのため、密儀研究においてもこの結社の影響は看過できず、テ・リンデルトはイルミナーティの世界観との関係を論じている。[11]

ボルンは「真の一致」の創立メンバーではなく、一七八一年に「職人」として加入し、すぐに「親方」に昇進する。

翌年ロッジのマスターになると、彼はメンバーたちに新しい形態の教育ロッジを提案する。「通常の教育ロッジではわれわれの結社の様々な位階に定められている掟、しきたり、儀礼、質問と答えを伝える」[12]が、ボルンはそうした事柄に加えて、あらかじめ許可を得たメンバーたちに論文の朗読の機会を提供しようとする。

> その題材はそれゆえに、自由七科、道徳、きわめて広い理解での自然科学、数学からとられなくてはならない。神学論争、法学、政治的な国家体制に関わることはわれわれの仕事ではない。というのもそれらはメイソンリーとは関わりが無いからだ。[13]

ここでボルンが想定している内容は「われわれの掟自体がその知識や取り扱いを指示している対象」[14]としながら、政治や宗教を除外した学問一般になっている。ボルンの提案を受けたメンバーたちの大半は支持を表明したものの、三名の親方からロッジのアカデミー化を危惧する声が上がり、結局、妥協が図られ、メイソンに関することに内容は限定されて一七八二年一一月四日に演習ロッジとして実施される。[15]演習ロッジはわずか三年の間に二一回に及んでいる。そして当初は四四名だった参加者も徐々に増え、出席者が判明している一七回分の参加者は延べ人数で一三四五名、一回あたり平均およそ八〇名であった。[16]

演習ロッジのテーマがフリーメイソンリーに関係することに限定されたとはいえ、一七八四年九月に「真の一致」ロッジを訪れたフリードリヒ・ミュンターが「ボルンのロッジ全体は一種の学問のアカデミーである」[17]と述べているように、ボルンのロッジは、他のロッジからの来訪者にとっては、通常のフリーメイソンリーのロッジには見られない性格を獲得したのである。しかも、このロッジはイルミナーティの結社の影響が強く、演習ロッジでは「イルミナー

ティ以外は朗読を許されなかった。徒弟や職人の位階のロッジでも同様だった[18]」のである。

ボルンによるアカデミー化の取り組みは演習ロッジに限らない。彼は学問的成果の公表のために定期刊行物の発行も行っている。フリーメイソンリーに直接関わる分野では本論で考察の対象となる論文を掲載した『フリーメイソンのためのジャーナル』*Journal für Freymaurer*（一七八四〜八六年）を刊行したほか、自然科学分野では『ウィーンの一致した友人たちの自然学論文』*Physikalische Arbeiten der Einträchtigen Freunde in Wien*（一七八三〜八八年）を刊行している。『ジャーナル』の目的については八三年一一月三日のロッジでアロイス・ブルーマウアーが読み上げており、ロッジのプロトコルには「メイソンリーは啓蒙と哲学的研究、ならびに宗教によって、失うものがあるというよりはむしろ利益を得るのだということを示した[19]」と記録されている。

それではなぜボルンはロッジのアカデミー化を目指したのだろうか。ボルペールは、ボルンが「ウィーンに帝国科学アカデミーが不在であることが、オーストリア啓蒙の弱点になっている」と考えたためだとしている[20]。自身はバイエルンのアカデミーの会員でもあったボルンは、ロッジという公的な社会からは隔離された空間の中であるとはいえ、仮想的なアカデミーを実現しようとしたのであろう。

(9) Vgl. Hans-Josef Irmen (Hg.): *Die Protokolle der Wiener Freimaurerloge "Zur wahren Eintracht" (1781–1785)*. Frankfurt am Main 1994, S. 9.
(10) Vgl. ebd., S. 13.
(11) Vg. Wilgert te Lindert: *Aufklärung und Heilserwartung*. Frankfurt am Main 1998.
(12) Erich Lessing (Hg.): *Die Übungslogen der gerechtigten und vollkommenen Loge zur wahren Eintracht im Orient zu Wien 1782–1785*. Wien 1984, S. 21.

(13) Zit. nach Lessing (Hg.): *Die Übungsloge*n, S. 23.
(14) Ebd.
(15) Vgl. *Die Protokolle*, S. 97.
(16) Ebd., S. 17.
(17) Zit. nach Edith Rosenstrauch-Königsberg: *Freimaurer, Illuminat., Weltbürger. Friedrich Münters Reisen und Briefe in ihren europäischen* Bezügen. Berlin 1984, S. 74.
(18) Ebd.
(19) *Die Protokolle*, S. 170.
(20) ピエール＝イブ・ボルペール『「啓蒙の世紀」のフリーメイソン』深沢克己編　山川出版社　二〇〇九年、三九頁。

II 「エジプト人の密儀について」

ボルンは『フリーメイソン・ジャーナル』の創刊号に自ら「エジプト人の密儀について」という密儀研究の論文を掲載している。なお、「真の一致」の演習ロッジについての記録では、一七八二年一一月四日の第一回演習ロッジで「論文の第一章を朗読。この論文で彼はエジプトの密儀をメイソンリーの密儀を用いて検討している」[21]、さらに同年一二月二日の第二回演習ロッジでは「それからこの大いに尊敬されるべき人［＝ボルン］はエジプトの密儀とわれわれの王の技法の密儀との比較についての研究の第二章を朗読した」[22]となっており、このときの発表論文が『ジャーナル』の原稿になったものと思われる。

ボルンは、第一章で古代エジプトの民族について概観した後、第二章を神官の考察に、第三章をエジプトの密儀とフリーメイソンのそれとの比較にあてている。主に論拠として引用されている文献はプルタルコス、ディオドロス、

ヘロドトスである。

ボルンは、古代エジプトの神官集団には二階級あり、知識に携わる者と礼拝の習慣的なものに携わる者とに分けられていたとする。[23] そして知識に関わる神官には、ヘルメスの一〇書を管理し礼拝や神官の監督をする大神官から、ヒエログリフ、宇宙誌、地理、星辰の運行、エジプトの地理、神殿の準備・行事に通じた秘儀の書記、占星術師、さらには自由技芸に携わる歌手たちもいたとする。[24] 知識に携わる神官集団の有する知識は、単なる哲学ではなく、学問全体である。[25] ボルンによれば、エジプトの神官の知識の中で第一の地位を占めるのは自然学であり、[26] そこには自然の生成史、博物学、天文、地理といった学問だけではなく、今日では失われてしまった知識も含まれる。それは内奥の秘密を伝授された者以外には固く閉ざされたヘルメス的哲学であり、魔術や錬金術を含んでいたとする。[27] そして魔術でボルンがイメージするのは『旧約聖書』の「出エジプト記」七章および八章でのアロンの杖のような奇跡である。[28] なお、出エジプト記の記述では、「アロンが自分の杖をファラオとその家臣たちの前に投げると、杖は蛇になった。そこでファラオも賢者や呪術師を召し出した。エジプトの魔術師もまた、秘術を用いて同じことを行った」[29] とあり、神官集団の一員とは明示されていないが、ファラオの周辺に魔術を使う者がいたことを示している。一方、錬金術についてボルンは、エジプトの神官たちに貴金属の変容・産出の力があったかもしれないと推測している。このようにボルンがエジプトの神官集団の属性として注目しているのは知識に携わるという点である。

こうした該博な知識を有する神官たちの神観念は民衆のそれとは異なる。古代エジプトの一般の人びとは自分たちの周囲の被造物に高次の存在の作用を感じながらも精神的な存在をイメージできないので、多様な被造物を高次の力・創造者自体だとみなした、[30] つまり神を具体的な物質的な存在としてイメージしていたわけだが、神官たちにとっての神は、感覚では捉えられない自然を超越した存在としての神、「あらゆる事物の始まり、神々のなかの神、一にし

て原存在[31]」なのである。だが、こうした神のイメージは、無限を表象することができる創造的な精神にのみ把握可能であり、物質的な神しか知らない民衆に「自分自身に打ち克ち、見ることができない一なる神を認識する魂の強さをどれだけ期待できるというのか[32]」。だからこそ民衆には、神官たちが秘儀伝授によって抱く唯一神の諸性質をイメージ化した「神々」を選ばせておいたらよいとする[33]。ここに「神官集団の秘儀の教え＝唯一神」と「民衆向けの教え＝物質的な神々」という一神教と多神教との二重宗教が認められる。これは善悪の観念にも関連づけられる。具体的なイメージで捉えがたい魂の不死のような概念は、民衆の場合には死後の罰や報償、つまり生前の善悪によって善い動物や悪い動物へと生まれ変わることに置き換えられる[34]。

二重宗教では神官集団の有する知識は、民衆の文字と似てはいるが同一ではない神聖文字、ヒエログリフによって秘匿され、選ばれた者にしか伝えられない。王もまた秘儀を受けることが必要であった[35]。神官集団への加入を求める志願者は自由人でなければならず、女性や手工業者、農民、牧人は不適とされ、土着のものに限定された。そして加入を許された新参者は、毅然とした態度（Standhaftigkeit）と辛抱強さ（Beharrlichkeit）についての極めて厳しい試験を経て、最後に割礼を受けなければならなかったという[36]。

ではなぜ神官集団への志願者の資格は限定されているのか。ボルンは第三章でフリーメイソンリーでも資格が同様に限定されていることを指摘し、職人や農夫といった民衆には王の技法に必要な知識が欠けている上に、彼らの性格には高貴な行為に要求される雰囲気がないという[37]。さらに女性の排除については、「彼らは、女性には、神官たちが専念する高次の知識のための能力がないと考えており、彼女たちの沈黙を疑っていた。沈黙によって、エジプトの巨大な神官組織が固めている足場を常に部外者に注意深く隠してきたのだ[38]」と理由づけている。

ボルンは入会資格以外の点についても、エジプトの密儀とフリーメイソンリーとを結びつけている。ヘルクラネウ

ム遺跡にあったエジプトの儀式の絵に描かれた祭壇の周りを裸で踊る人物には、メイソンリーの儀式での体の一部の露出を対比[39]、さらに神や不死の教説、ヒエログリフ、数学、地理、エジプトの聖俗の歴史、博物学、ヘルメス学といったエジプトの神殿で開示された知識は、メイソンリーの儀式で用いられるトレーシングボードに描かれているという。例えば、国の最古の歴史を表すエジプト人たちの実情と知識を刻んだヘルメスの二本の柱や、地理学の知識を想起させる長方形、神殿に投げ入れられる縄（メイソンリーではソロモン神殿の装飾に変化）である。メイソンリーのシンボルとしてよく知られている直角定規やコンパスなどは、まだ高次のクラスに進んでいない神官である測時学者が取り組んだものであり、その研究はメイソンリーの職人の位階に推奨されるという。その他にも、オシリスが発明したとされる建築術を象徴する鏝、オシリスとイシスを暗示する太陽と月、カノープス（頭文字のCがメイソンではGに変化）、イシスの神殿の配置とロッジの方角など、ボルンは推測を書き連ねている。さらにボルンはヒエログリフとフリーメイソンリーのトレーシングボードに描かれた象徴との類似のほかにも、役職の対応、三という数字や三角形、青色、太陽（光）、祝祭・葬儀などを結びつけている[40]。

このようにボルンはエジプトの神官集団とフリーメイソンリーとの共通性を強調する。ボルンが想定する「真の」フリーメイソンリーとは、それゆえにエジプトの神官集団のような知識集団である。それも民衆にはその知識に耐えうる能力がないとの理由から、知識の秘匿が是認される。それどころかあえて民衆を迷妄のうちに置き去りにする。ボルンにとって知識はエリートのものなのだ。だが、同時にその知識は人類全体のために用いられなければならない。神官たちの知識はエジプト国家およびその国民の幸福のために用いられたばかりか、外国人であっても真の知への欲求が認められた能力のある人物たちは受け入れられ、教育を施されたという[41]。そしてエジプトの密儀の考察を進めてきたボルンは最後に「それゆえ真理、知と人間の幸福がエジプトの密儀の最終目的である[42]」と結論づけ、これは同時

にメイソンリーの最終目的だとする。

> 真理、知、全人類の幸福の増進はわれわれの結びつきの本来の最終目的ではないか。われらの掟は一歩一歩この目的をさまざまなイメージで刻みつけているのではないか。真理は同様に失われた親方の言葉ではないのか、その再発見をわれわれはわれらが徳のために築く隠れ家で喜んではいないか。悪徳、無知、おろかさに対抗し、啓蒙を普及させることがわれわれの使命ではないのか。[43]

エジプトの密儀の考察は、メイソンリーの目的を啓蒙の普及に見るボルンのメイソン観を強化する。エジプトの密儀との比較を通して、ボルンは自らのロッジ「真の一致」の啓蒙推進路線に正統性を付与しようとしているのである。そして、神官集団が同時に学問集団であったという認識は、自らのロッジを学問集団に変えたいというボルンの願望を支持する論拠となる。もちろん、エジプトと自らの結社を結びつける試みは、フリーメイソンの結社が啓蒙の普及という目的で一致しているわけではないことの裏返しでもある。ボルンは神官集団の学問に注目するが、錬金術や魔術への関心からフリーメイソンリーにひきつけられる人々も少なくなかったのである。エジプトの神官集団が、他国に侵略され、うわべしか知らない道化集団になり下がってしまったように、メイソンの中でも「言葉・握手屋、儀礼屋、秘密運搬人」が「ガラクタを売りに出そうとしている」ことに注意を促してボルンは論を結んでいる。[44]

(21) *Die Protokolle*, S. 98.
(22) Ebd., S. 103.

(23) *Journal für Freymaurer* 1 (1784) 1. Vj., S. 51.
(24) Vgl. ebd., S. 51–53.
(25) Vgl. ebd., S. 55.
(26) Vgl. ebd., S. 64.
(27) Vgl. ebd., S. 72.
(28) Vgl. ebd., S. 73.
(29) 「出エジプト記」七章第一〇～一一節、新共同訳。
(30) Vgl. *Journal für Freymaurer* 1 (1784) 1. Vj., S. 45f.
(31) Ebd., S. 58.
(32) Ebd., S. 58f.
(33) Vgl. ebd., S. 59.
(34) Vgl. ebd., S. 60.
(35) Vgl. ebd., S. 77.
(36) Vgl. ebd., S. 49. なお、為政者が神官集団の参入儀礼を受けて秘儀を伝授される、しかもその際に毅然とした態度が試験されるという点は、モーツァルトの『魔笛』を想起させる。さらに民衆を排除している点も、密儀を途中で断念せざるを得ないパパゲーノを想起させるかもしれない。ただし、『魔笛』では女性であるパミーナが秘儀に与るという点で異色である。
(37) Vgl. ebd., S. 89.
(38) Ebd., S. 92. これもまた『魔笛』の沈黙の試練や女性たちに気をつけるようにという忠告を想起させる。
(39) Vgl. ebd., S. 101f.
(40) Vgl. ebd., S. 105ff.
(41) Vgl. ebd., S. 81.
(42) Ebd., S. 128.
(43) Ebd., S. 130.
(44) Ebd., S. 128–132.

Ⅲ「学問的メイソンリーについて」

この論文の著者については諸説ある。テ・リンデルトはラインホルトの著作として扱い、彼の「ヘブライの密儀」論の対になるものとして扱っている。[45] また、イルメン編纂の「真の一致」ロッジのプロトコルではボルンの業績とし、「親方昇進の折の講演」[46]とコメントを付している。ただし、それがいつの集会のことなのかは明示されていない。おそらく本論文の中で著者が以下のように述べていることからこのようなコメントが付されたものと思われる。

> みなさんはまさに証人であるわけだが、親方の位階では、全身全霊を込めて参加したときに、どんな感情が兄弟の心に引き起こされ、そしてどんな感動を抱いて立ち去ったのか。おお兄弟たちよ、この死のイメージ、万人を待っている永遠の憩いの場である棺桶に生きたまま入れられること、前もって狭い箱に身を横たえるこの試みをすること、それは知を保存する資格を有するあらゆる人々の心情に素晴らしい効果を及ぼすのである。[47]

棺桶に身を横たえるという動作はフリーメイソンリーの親方の昇進儀礼の一部であり、この論文が昇進儀礼の後の講演であることを示している。モイマンもこれが親方への昇進儀礼の後の演説であることから、儀式を執り行ったロッジのマスターであるボルンが演説したものだと推測している。[48]

一方、アスマンとエーベリングによるアンソロジー『エジプトの密儀。啓蒙主義とロマン主義における地下への旅』では著者はフランツ・アントン・クライルとされている。[49] アスマン＝エーベルングも指摘しているように、クライルは一七八五年四月一六日および二二日に「学問的なメイソンリーは存在するのかという問いについての講演」をして

いる。[50] とりわけ二二日の講演は親方への昇進儀礼の後に行われており、講演論文の内容との矛盾はなく、クライルが著者である可能性は高いと思われる。なお、四月一六日はモーツァルトの父レオポルトの職人昇進儀礼、二二日には親方昇進儀礼が行われており、モーツァルト自身も参加しているので、少なくともこの講演を通してモーツァルトは古代密儀の二重構造を知っていたと思われる。[51]

それでは論文の内容を検討してみよう。この論文は先のボルンの議論をさらに推し進め、古代エジプトの神官たちの知がフリーメイソンリーのなかに継承されていることを主張する。匿名の著者のテーゼは以下のとおりである。

> すべてを正確に吟味すると、古代に知識の痕跡が認められると思う。その知識は、われわれのものと混ざって、一般には流通しておらず、その結果、もはや公には存在していない。しかしそれがゆえに、おそらくは、完全に失われたわけではなく、密かに、そしてひょっとしたらわれらの結社において伝えられたのだ。もしそうなるのならば、われらが所持している三つの位階のヒエログリフは、その知識の媒体でなければならないだろう。しかしどのみちその知識はその性質からして完成された人間にしか伝えられないであろうし、理性的に考えれば、それゆえ決してわれわれ兄弟たちの探求の対象とはなり得ないのだ。[52]

まず、著者は知識の集積によって学問が発展していくという考え方を否定する。人類は全体としては進化しているわけではない、ある国家・文化が発展・黄金時代を迎えると、次に別の国家・文化が興隆し、再び没落する、この繰り返しだというのである。[53] つまり、著者は、古代の学問は現代と比べて見劣りするものではなく、[54] 一定の水準に達していたと考える。古代の人類の知識が見劣りするのは、われわれが手にできる痕跡が時代の波に洗われてごく僅かしか

ないからである。著者はこのように古代の知の水準は高かったとしたうえで、こうした知は地理的な要因からエジプトの神官集団に集積されて秘匿されたと推測する。[55] かくして古代の知というテーマはエジプトの密儀の問題であることが明らかになる。この論文は、先に検討したボルンのエジプトの密儀論と共通の関心に基づいており、テーマをエジプトの密儀のなかでも知の伝達に絞っているといえよう。

それではなぜ知識は秘密にされなければならないのだろうか。神官たちは秘密にすることで、知識を部外者の目から守り、後世に伝えたのだとする。[56] 知識は人類の共通の財産として公開されて、誰もがアクセスできるようにすべきではないのか。なぜ、部外者から守らなければならないのか。それは神官たちの利己心から生じたものではない。著者は以下のように述べている。

> それゆえもし賢者たちがその完成の段階で知識を秘密にするのだとすれば、考えられる動機はまさにこのようなものだ。彼らの知識が、世俗の人々にとって害であるためであるか、試練を経ていない人物や精神には理解できないか、聡明さが欠けていたり、心が弱いために誤用されうるからである。あるいは民衆は知らない方がよい事物について民衆を啓蒙する知識だからである。[57]

ここで著者は知識が万人にとって良いものではないと指摘する。民衆にとって害悪になる、あるいは知らないほうがよい知識があるというのだ。また、知識を理解するための能力も問題にされている。秘儀は秘儀に相応しい者にのみ開示される。秘儀で開示されるものは、努力の対象ではない、つまり能動的に摑み取るものではなく、自分が秘儀に相応しい者になるよう努めることで、自ずから開示される。秘儀を伝授されるのは、「もっとも高貴にして最良の人物」

であり、「入念に吟味をした後に秘儀参入を許」される。こうして神官集団に加わった者たちの「生活様式は、彼らの素質である善をますます発展させ、徳をますます成熟させることを目指している」のであり、質素で勤勉に暮らすことが求められる。[58]

このように古代の知識の継承を検討してきた著者は、論文の残り三分の一を費やして、フリーメイソンリーとの関連を考察する。ただし、この考察はそもそも「もし彼らの学問がまだあるとすれば[59]」という仮定の上に成り立っており、メイソンリーにそれがあることを立証できているわけではない。著者はエジプトの学問の存在を前提すれば、「それは秘密結社のなかに、ある種の秘儀のうちにある。そのような機関はそうした学問の存在のためにはどうしても必要である[60]」とし、そうした結社はまさしく「メイソンリーの一派[61]」であると仮定する。その際に著者が念頭に置いているのはもちろん自分たちのロッジ「真の一致」である。

> これまで私が述べてきたことからすでに、一般的に認められている、われわれの三つの象徴的位階のヒエログリフがわれわれの秘儀の伝達手段あるいは伝導するものであるということはきわめてあり得そうなことである。[62]

著者はこのように高位階ではなく象徴的位階、すなわち「徒弟」「職人」「親方」という基本となる三位階のヒエログリフこそが古代の知識の伝達手段であるとする。象徴的位階は各派に共通しており、その確実性は保証されている。それに対して、高位階は流派ごとに異なるものであり、各々がその確実性を主張しているだけにすぎないのであり、そこに象徴的位階とは別のヒエログリフが存在すると肯定することは困難だとする。そして仮に本当に秘密があるとしても、多額の金銭を代価にして開示されるような秘密であるのならば、それはメイソンリーの秘密ではない、なぜ

ならば「メイソンリーの秘密は普遍的な人類の幸福だけを目的に持ちうるものである。そしてその伝授は無償で行われる」[63]からだと断じる。この発言からは、他のロッジにおいて高位階への昇進が集金システムになっていることへの批判が読み取れる。

だが、フリーメイソンリーの象徴的位階のヒエログリフがエジプトの大密儀で開示される秘密の「伝達手段」であったとしても、親方の位階に達することでメイソンがエジプトの知を手中に収めるわけではない。伝達手段があっても、それを解く鍵が与えられるわけではない。著者は明示していないが、先に検討したボルンの論文から判断すれば、それは「失われた親方の言葉」であるかもしれない。ボルンは先に検討した「エジプトの密儀」の中で「真理は同様に失われた親方の言葉ではないのか」[64]と述べている。「失われた親方の言葉」とは、フリーメイソンリーの親方の儀礼で志願者が体験するヒラム伝説に登場する親方の合言葉で、ヒラムはその秘密の開示を迫った職人たちに殺害されたとされる。「真の一致」ロッジのメイソンの理解では、メイソンリーに古代密儀の真理が伝わりながらも、ヒエログリフを解く鍵は失われており、メイソンは真理が自ずからベールを掲げてくれるに相応しい人物になろうと努力すべきだと考えるのである。

(45) Vgl. te Lindert: *Aufklärung und Heilserwartung*, S. 258.
(46) *Die Protokolle*, S. 26.
(47) *Journal für Freymaurer* 2 (1785) 3. Vj., S. 72.
(48) Vgl. Markus Meumann: *Zur Rezeption antiker Mysterien im Geheimbund der Illuminaten: Ignaz von Born, Karl Leonhard Reinhold und die Wiener Freimaurerloge Zur wahren Eintracht*. In: Monika Neugebauer-Wölk (Hg.): *Aufklärung und Esoterik*. Hamburg 1999, S. 288–304, hier S. 296.

(49) Vgl. Jan Assmann u. Florian Ebeling: *Ägyptische Mysterien. Reisen in die Unterwelt in Aufklärung und Romantik*. München 2011.
(50) Vgl. ebd., S. 115.
(51) レオポルトは息子ヴォルフガングと同じ「慈善」ロッジの所属だが、昇進儀礼は「真の一致」で行われた。また、ヴォルフガングの職人昇進も「真の一致」でおこなわれている。
(52) *Journal für Freymaurer* 2 (1785) 3. Vj., S. 51.
(53) Vgl. ebd., S. 55.
(54) Vgl. ebd., S. 57.
(55) Vgl. ebd., S. 60f.
(56) Vgl. ebd., S. 61.
(57) Ebd., S. 68.
(58) Vgl. ebd., S. 67.
(59) Ebd., S. 69.
(60) Ebd.
(61) Ebd., S. 74.
(62) Ebd., S. 75f.
(63) Vgl. ebd., S. 77.
(64) *Journal für Freymaurer* 1 (1784) 1. Vj., S. 130.

Ⅳ 『ヘブライの密儀』

一方、ラインホルトは『ヘブライの密儀あるいは最古の宗教的フリーメイソンリー』でエジプトの大密儀にルーツ

を持つものとしてヘブライの密儀を取り扱う。彼はバルナバ会で哲学・神学を学んだ修道士であるが、一七八三年四月にフリーメイソンとなり、さらに同じ年にイルミナーティの結社に加入している。しかし、同年一一月には修道院を逃亡し[65]、ライプツィヒで学んだ後、ボルンの人脈を利用してヴァイマルのヴィーラントの許に身を寄せている。ラインホルトはヴィーラントを手伝って『ドイツ・メルクール』に携わるが、この雑誌に一七八六年から翌年に発表した連載（後に『カント哲学についての書簡』*Briefe über die Kantische Philosophie*として出版）でカント哲学の普及者・注釈者として名をなし、イェーナ大学、キール大学の哲学教授となった。『ヘブライの密儀』はラインホルトが逃亡後の一七八六年に『フリーメイソン・ジャーナル』に2回に分けて発表した論文[66]を一七八八年に兄弟デーツィウス（Br. Decius）の名で単著として刊行したものである。なお、デーツィウスはラインホルトのイルミナーティの結社における結社名であり、このヘブライの密儀論文は元来フリーメイソンリーの機関誌のために書かれたものでありながら、ラインホルトの立場はイルミナーティを意識していたことを暗示させる。

第一講義は「ヘブライ人の小密儀について」、第二講義は「ヘブライ人の大密儀について」となっており、本書の構成からも、ラインホルトが理解するヘブライの宗教が二重宗教であることが分かる。これはもちろん先に検討したボルンの古代エジプトの二重宗教に接続するものである。つまり、ヘブライの宗教においても、一般民衆に開示されない密儀があるということである。

第一講義の中でラインホルトは以下の二点を論証しようとする。一、モーセはエジプトの密儀の秘密の教えを単にヘブライの宗教の基礎としただけではなく、公然の基本教義とした。二、新しい礼拝の儀式や象徴をエジプトの密儀から受け入れた。その際、必要最小限の改変が加えられただけである[67]。

ラインホルトはウォーバートン[68]を援用しながら、エジプトの密儀の教えとは一神教であり、多神教の歴史哲学的否

定であるとする。[69] これがモーセの宗教の基礎となるわけだが、それはヘブライの民族の独創ではなく、ファラオの娘の養子となってエジプトのすべての知識と特権を享受していたモーセのおかげだとする。そもそもイスラエルの人びとのエジプトでの宗教はエジプトの民族宗教である多神教であったとする。[70] ラインホルトはさらに神の名前について考察を進める。多神教では神の属性によって名前を分ける必要があったが、創造の神＝デミウルゴスにはエジプトの賢者たちは名前を与えなかった。エホバは「存在する者（der da ist）」、「自分自身による存在（das Dasein von sich selbst）」を表し、神の本質の中でも最高の属性だとする。[71] そしてこの名前をラインホルトは、秘儀を与える導師によって歌われた讃歌「彼は自分自身だけによる唯一者である。そしてこの唯一者に万物はその存在を負っている」、サイスのピラミッドの銘「われは存在し、かつて存在し、これから存在する一切である。わがベールを死すべき者が掲げることはない」、そしてイシス像の下の銘「われは存在する者なり」と結びつけ、[72] エジプトの密儀の神とモーセの神とを同一視する。[73]

モーセはシナイ山での啓示を一種のイニシエーションに見立てる。これはエジプトの密儀の野外劇にほかならず、[74] イスラエルの民は試練を経て神の民になる。そこで伝授される秘儀は、一、神は自分の名前で素性を明かす、二、多神教の禁止、の二点である。この秘儀伝授では、エジプトのそれのように段階的に脱幻想化が図られるのではなく、「暴力的、神権政治的に神々を否定しており偶像崇拝に対する残忍な闘い」[75] が行われる。

一神教というエジプトの密儀の核心を伝えながら、他の秘密はなぜ開示されないのか。ラインホルトは、民衆の無知とこれまでの抑圧を理由に挙げている。[76] 秘儀を伝授される者の理解力の問題は、ボルンのエジプトの密儀論と同様の論点である。理性で把握される創造する神＝デミウルゴスの認識は民衆の理解力では無理があり、民衆の感性に訴えかけるさまざまなものが加味されたのだとされる。[77]

それではなぜ民衆が理解できない唯一神をモーセは与えたのか。この点について、ラインホルトは第二講義「ヘブライ人の大密儀について」において、神権政治の観点から明らかにしようとする。第二章で彼はエジプトの秘密は理性的に認識されるのに対して、ヘブライの宗教は盲目の信仰だとし、エジプトでは秘密を大衆に隠さなければならなかった原因が、モーセの宗教の場合にはその秘密を民族全体に啓示する原因になったのだという。エジプトでは国法がさまざまな神の権威に基づいていたため、多神論の虚偽と唯一神の存在が明らかになれば国家が維持できなくなるのに対して、イスラエル人の場合には、唯一神の存在を告げなければ、この神への信仰を前提とする律法を維持できない。つまり、法の根拠が神の様々な属性によって区別された多様な神にあるのか、唯一神にあるのかということである。ヘブライの民族神はそれゆえ民衆に法を与える立法者であり、法解釈の最終判断を下す文字通りの王となった。[78]

それゆえもしいずれかの民族に大密儀を導入することが、盲目の信仰が政治的に不可避であることの必然的な帰結であるのならば、このことはますますヘブライの人びとにも当てはまるように思われる。モーセの宗教の聖所は同時に国家の内閣であり、そこから統治は聖職者の意図によって行われ、民衆信仰は統治者の意図により操縦されなければならなかった。宗教と政治はここでは同一の秘密を持っており、したがって、共通の鍵を持っていた。それは国家の指導者たちの手中にあり、後継者に伝えられなければならなかった。[79]

もちろん、社会の発展とともに限られた神官だけの統治には限界が生じ、市民的な事柄には一定の制限を加えて平信徒を統治に参画させる必要が生じる。そうした平信徒には大密儀の最低段階の秘密が開示された。[80] また、七〇人の長老たちはより高い段階の秘儀を伝授されていたのだが、次第に「秘密への鍵」は失われたという。[81] では、秘密の鍵は

完全に失われたのだろうか。ラインホルトによれば、ヘブライの立法者の精神、つまり神権政治は第二の機関、預言者学校で維持されなければならなかった。預言者学校は学者たちの団体であり、専ら法の記述や説教はこの団体のものであり、弟子たちの育成という機能から学校と呼ばれたのだという。[82] 彼は「サムエル記」一九章のサウルのエピソードを紹介し、ウォーバートンの解釈を援用しながら、この学校が神権政治の維持を目的とする機関だとする。サウルは祭司を軽視して自ら統治しようとしたがために、イスラエルの立法の根拠が危機にさらされたのであるが、ダビデはサウルとは逆にサムエルの許に留まり、預言者学校で教育を受け、神権政治へと回帰したとする。[83]

第二講義の最終章はメイソンリーの密儀とヘブライのそれとの比較にあてられ、一七八〇年代ドイツ語圏のフリーメイソンリーを取り巻く否定的な状況が問題にされている。ラインホルトはまず第一節をメイソンリーの小密儀にあて、「われわれはヨハネ・ロッジのメンバーとして、われわれが持つヒエログリフや儀式の本来的な意味およびわれわれの結社の秘密の目的との関係について、ヘブライの平信徒が彼らの典礼規則の意味や本来の目的について知っているのと同じくらいのことを知っている」[84]、つまりメイソンリーの象徴的位階はヘブライの小密儀に相当すると述べている。すると大密儀に相当するのは高位階への参入儀礼ということになるのだろうか。ラインホルトの立場は先に見たボルンの場合同様否定的である。すでに述べたようにラインホルトは一七八二年のヴィルヘルムスバート会議に言及し、この会議の結果、高位階には自分たちを満足させるような秘密はないことが明らかになったとする。メイソンリーの隠された目的は、結社の歴史や儀式のうちには見いだせず、「自分の心の中に」探した結果、結社の首領たちが見出したのは「広い意味での慈善」にすぎず、メイソンリーで用いられる儀式や象徴、言葉を説明するものではなかった。[85] 結社の首領たちはいわば平信徒同様になんら秘密を開示されているわけではないことを認めたわけである。そこで、結社の首領たちは「神権政治の秘密のための鍵を失った」サンヘドリン（七〇人会議）と比較されることになる。サ

ンヘドリンの構成員は祭司ではないが、当初は大密儀の一部を開示され、神を王＝立法者とする神権政治の秘密に与っていた。だが、「システムがひとたび動き出すと、鍵は気づかぬように平信徒たちの手からもぎ取ることが善いと見なされた」ために、サンヘドリンは秘密の鍵を失ったのだという。[86]

秘密の鍵はヘブライでは預言者学校で継承されたわけだが（第二講義第五章）、メイソンリーにも同様の機関があるのだという。フリーメイソンリーの場合も、世俗化によって神権政治の秘密の鍵を失ったサンヘドリンと預言者学校の関係と同様に、何ら秘密に関与していない首領たちと真の秘密の継承者という二重構造があるというのである。そして、秘密の鍵を継承する機関としてラインホルトが唐突に名指しするのはカトリック教会である。ヘブライの密儀の分析から浮かび上がった神権政治の構造が、当時のフリーメイソンの混乱した状況の責をカトリック教会、イエズス会に押しつける根拠として利用されているのである。

テ・リンデルトは『フリーメイソン・ジャーナル』に掲載された元の論文を検証し、あからさまな反ユダヤ主義が現れているとし、ラインホルトは「ユダヤの宗教をエジプトの真の宗教の倒錯と解釈している」[87]と断じる。そして「宗教的フリーメイソンリーを、彼［＝ラインホルト］はフリーメイソンリーをオカルティズムや降霊術、錬金術、神智学、経験主義といった誤謬へと導いたあらゆるシステムであると解釈している」[88]。だが、序論から論文の意図を読み取るに、彼はヘブライの宗教自体を否定的に捉えているわけではないように思われる。序論でラインホルトは、古代密儀の秘儀伝授はその最盛期には決して虚飾ではなく、秘儀を伝授された者には秘儀の対象を誤認することはなかったのであるが、「賤民や賤しい志操の持ち主」が聖域に押し入ってくるにつれて失われたのだという。[89]その結果、「以前はその意味を考察することができたヒエログリフは、今では単に信仰されなければならない内的な力しか持たなくなった」[90]ために、学問的な精神の対象から信仰の対象へと変じる。ラインホルトが本書で問題にするのは秘密の喪失

による密儀の形骸化なのである。ではこの形骸化の原因はヘブライの宗教自体にあるのか。ラインホルトは単行本として刊行する際に序論に加筆をし、フリーメイソンリーのヒエログリフの重要なものが宗教起源であり、それもヘブライの宗教にあることを明言する。メイソンリーで問題となるのは他の宗教の神殿ではなく、「ユダヤ人の破壊された神殿、キリスト教徒の粗野な信仰の基礎をなしている宗教の神殿を建設すること」[91]なのであり、ヘブライの密儀自体は決して否定の対象ではない。フリーメイソンリーはその伝説の中でソロモン神殿の建設をルーツとするが、ラインホルトはまさにヘブライの密儀を考察することで、フリーメイソンの本来の姿を探ろうとしているのである。そしてメイソンリーの本来の姿をヘブライに（さらにその起源はエジプトの密儀にさかのぼるのだが）認め、「宗教的メイソンリー」と捉える。だが、最終章で唐突に表れた感はあるが、同時代のメイソンリーの混乱状況がヘブライの神権政治の二重構造になぞらえられるとき、アスマンも指摘するようにエジプトの理性の宗教が盲目の信仰の機関に成り下がったことへのラインホルトの言外の批判を読み取ることができるのである。[92]

(65) 同時代の書簡などから直接のきっかけはある女性との恋愛だとされるが、カトリックの教権主義とラインホルトが影響を受けていたイルミナーティ・啓蒙主義的立場との分裂を看過すべきではない。Vgl. Gerhard W. Fuchs: *Karl Leonhard Reinhold - Illuminat und Philosoph*. Frankfurt am Main 1994, S. 33.

(66) *Ueber die Mysterien der alten Hebräer*. In: *Journal für Freymaurer* 3 (1786). 1. Vj., S. 5–79. *Ueber die größern Mysterien der Hebräer*. In: *Journal für Freymaurer* 3 (1786). 3. Vj., S. 5–98. 講演原稿の体裁をとっているが、実際にロッジで講演したわけではない。

(67) Vgl. Reinhold: *Die Hebräischen Mysterien*, S. 32f.

(68) ウォーバートンの主著は一七五一～五三年に独訳されており、啓蒙主義においては最もスタンダードな宗教史・文化史の著作だった。Vgl. Jan Assmann: *Nachwort*. In: Reinhold: *Die Hebräischen Mysterien*, S. 179.

(69) Reinhold, a.a.O., S. 34.
(70) Vgl. ebd., S. 36.
(71) Vgl. ebd., S. 41.
(72) Vgl. ebd., S. 41f.
(73) アスマンによれば、ウォーバートンは密儀の神とギリシアの哲学者の神とを区別しようと腐心しているが、ラインホルトは暗黙のうちにこの区別を廃棄し、密儀の神、モーセの神、哲学者の神を同一視している。Vgl. Jan Assmann: *Moses der Ägypter. Entzifferung einer Gedächtnisspur*. München ^{6}2007, S. 181f.
(74) Vgl. ebd., S. 184.
(75) Ebd., S. 184f.
(76) Vgl. ebd., S. 43.
(77) Vgl. Reinhold, a.a.O., S. 43f.
(78) Vgl. ebd., S. 78.
(79) Ebd., S. 87.
(80) Vgl. ebd., S. 89–91.
(81) Vgl. ebd., S. 91–93.
(82) Vgl. ebd., S. 96.
(83) Vgl. ebd., S. 96–102.
(84) Ebd., S. 117.
(85) Vgl. ebd., S. 117f.
(86) Vgl. ebd., S. 118.
(87) Te Lindert: *Aufklärung und Heilserwartung*, S. 207.
(88) Ebd., S. 209.
(89) Vgl. Reinhold: a.a.O., S. 15ff.
(90) Ebd., S. 17.

(91) Ebd., S. 20.
(92) Vgl. Assmann: *Religio Duplex*, S. 142.

おわりに

本論ではウィーンのフリーメイソン・ロッジ「真の一致」で研究された古代密儀のうちの三論文を検討してきたわけだが、これらに共通するのは、エジプトの神官集団の大密儀をフリーメイソンリーは継承しているという主張である。ただし、それは高位階システムではなく、すべてのメイソンリーに、そしてまたボルンらもまたその一員であったイルミナーティの結社にも共通する象徴的位階に継承されているとする。しかも、その秘密は象徴的位階のヒエログリフとして伝えられているものであり、それが古代密儀の伝達手段であったとしても、それを解く鍵は失われてしまっている。ボルンはそれをフリーメイソンの親方の儀礼でテーマとなるヒラム伝説の「失われた親方の言葉」と結びつけている。そしてメイソンの目的として啓蒙の普及を説き、オカルトに堕さないように警告している。彼にとって真のフリーメイソンは、エジプトの神官集団よろしく知的エリートの集団であるべきなのだ。これは「学問的メイソンリー」につながる考え方で、ボルンが自らのロッジを一種のアカデミーにしようとしたことも頷ける。

「学問的メイソンリーについて」においては、ボルンの見解に接続しながらも、エジプトの知識のフリーメイソンリーへの継承は秘匿された知識の媒体であるヒエログリフにとどまり、知識自体の開示については著者は口を濁している。真理は真理に相応しい状態に達した者に自ずと開示されるものであり、自己形成の努力が推奨される。ここにはシラーのバラード「ベールに覆われしサイスの神像」の密儀観と共通するものが認められよう。ただし、秘儀参入の志願者

の資格を問題にするこうした議論は、能力の欠如を理由に民衆を知識から排除する論拠にもなっている。啓蒙の普及を掲げながら、民衆は知的エリートによって与えられる知識を選別される未成年状態に留め置かれるのである。

これらの二論文では古代密儀の学問継承の性格が中心テーマとなるが、ラインホルトのヘブライの密儀論は趣が異なる。ヘブライの宗教もまたエジプトの密儀を継承していると理解されているので、二重宗教という基本構造は共通している。しかし、ラインホルトは第二講義で知の継承のために必要な預言者学校を神権政治の維持装置という観点から分析し、秘密の知への鍵を奪われて名誉だけを保った世俗のサンヘドリンと、神権政治の鍵を握って実質的な権力を握る祭司集団との二重構造に着目する。彼がヘブライの密儀に看取するのは、世俗の権威から秘密への鍵を剝奪することで祭司集団が密かに統治機構をコントロールしているという陰謀の構図である。これを当時のフリーメイソンの混乱状況に当てはめれば、エジプトの密儀の継承者である学問的メイソンリーには時代の流れの中で失った鍵の回復を求めることで正しい道を歩む可能性を見出すことができるが、ラインホルトが最終章で述べているように、錬金術や経験主義的な傾向を帯びた宗教的なメイソンリーの場合には、結社の公の統治機構とは別のカトリック教会ないしはイエズス会という「預言者学校」が失われた鍵の空白を信仰で糊塗し、いわば堕落させられているということになろう。ラインホルトはヘブライの密儀によって分析した二重権力の構図を用いて、フリーメイソンリーの混乱の原因を敵対するカトリック教会に帰しているのである。アスマンは『ヘブライの密儀』に「スペンサーとフロイトを結ぶ媒介」となる論点を認め、シラーの「モーセの使命」論文への影響を指摘している。[93] また、その密儀観はロマン主義文学への影響も指摘されている。[94] ラインホルトの密儀論は、その受容史から考察すると豊かな論点を有しているのであるが、同時に、同時代の文脈に置いたとき、陰謀論の側面も有しているのである。

(93) Vgl. Assmann: *Moses der Ägypter*, S. 174.

(94) 薗田宗人『峰々の対話――ゲーテをめぐる世界』松籟社　一九九三年、一一七―一一八頁参照。